

2014 年度自由学園最高学部 4 年課程卒業研究報告

遠藤 敏喜

(自由学園最高学部 副学部長)

原稿受付 2015 年 10 月 1 日；原稿受理 2015 年 10 月 10 日

Report on Jiyu Gakuen College Graduation Theses 2014

Toshiki ENDO

Vice President of Jiyu Gakuen College

2014 年度の自由学園最高学部 4 年課程（大学部）の卒業研究は、18 本の論文（うち 6 本は共同執筆）が提出された。また、卒業研究報告会では、全研究成果が口頭発表された。研究室主任会議において論文と発表が総合的に審議され、その結果、すべての卒業研究が合格判定であった。本稿では、卒業研究の論文タイトルと卒業研究報告会の様子を紹介する。

あわせて、3 年生による合同公開ゼミについてと 2 年課程卒業勉強についても付記する。

Keywords: 卒業研究, 卒業論文, 卒業研究報告会, 自由学園

1. 卒業研究の論文タイトルについて

(1) 卒業研究のねらい

自由学園最高学部 4 年課程は、自由学園で学んできた学業の集大成として、最終学年の 1 年間を通して卒業研究に取り組む。研究内容は 3 年生から 2 年間所属するテーマ別グループ研究の指導教員と相談して決める。

テーマ別グループ研究とは、「世界と日本の文化」「環境と経済社会」「ライフスタイル」「人間形成と教育」「自然の理解と創造」「数理モデルとインターフェイス」の 6 グループで構成されるゼミナール形式の授業で、次の 3 点をねらいとする。(i) 選択したゼミナールの学問領域の専門性を高める。(ii) 生活と学問の融合を目指す。(iii) 学問領域を横断する幅広い視野を大切にする。したがって、どのゼミナールも複数の指導教員で担当している。

4 年生は、卒業研究の成果を論文にまとめて、1 月末に提出しなければならない。提出された論文は、主査 1 名（これは卒業研究の主たる指導教員が担当）と副査 2 名（原則として卒業研究の指導に携わっていない教員が担当）による査読が行われる。また、3 月の第 1 土曜には卒業研究報告会が開催され、論文執筆者は全員が研究成果の口頭発表を行う。卒業研究の合否は、査読結果と口頭発表を総合的に審議し、研究室主任会議にて決定される。

(2) 2014 年度の卒業論文

2014 年度の卒業研究はすべてが合格であった。提出された論文は表 1 に示す 18 本で、うち 6 本が共同執筆であった。なお、表において、共著表記後のカッコの数字はメンバーの人数を表す。

表 1. 卒業論文一覧

世界と日本の文化		
1	思春期女性とファンタジー：高樓方子著『十一月の扉』から見る	単著
2	『ふたりのイーダ』：忘却から救い上げられた悲しみの記憶	単著
3	“ホロコースト”と“パレスチナ問題”：ユダヤ人として生きる基準	単著

環境と経済・社会		
4	地域と自由学園の持続可能な関係づくりに向けたサービス＝ラーニング・センターの研究：ケアリング・コミュニティを目指して	単著
ライフスタイル		
5	自由学園の特徴を活かした地域交流を考える	共著 [3]
6	現代の自由学園消費組合の在り方に関する実践と考察：現代における予定生活の研究	共著 [2]
7	「共食」が人との関わりにもたらす良好な影響：東京郊外 A 教会における“ランチ会”を事例とした調査研究	単著
人間形成と教育		
8	現代社会における子育てスタイルの一考察	共著 [4]
9	地域スポーツクラブで指導する親：コーチングスタッフとしての関わりとその動機付けの考察	単著
10	東久留米市における総合型地域スポーツクラブの発展の可能性：私立学校・自由学園施設の利用に焦点づけて	単著
自然の理解と創造		
11	自由学園校内における自然資源有効活用の一考察：粉塵爆発を用いて	共著 [3]
12	小麦の性質と製品：東久留米産小麦を用いて	共著 [2]
13	自然と人のかかわり：武蔵野の野生種と移入種	共著 [2]
数理モデルとインターフェイス		
14	自由学園の習字教育と毛筆文字の数理解析	単著
15	幾何学的錯視の拡張と応用	単著
16	リベラルアーツ大学における学生満足度の構造方程式モデリング	単著
17	ボロノイ図を応用したサッカーの守備戦術の解析	単著
18	椅子の品質保証のための技術開発：間伐材の有効利用にむけて	単著

2. 社会への発信

(1) 卒業研究報告会

2015年3月7日（土）9時から17時半まで、自由学園記念講堂において、卒業研究報告会が開催された（遠藤 2015c）。各研究の発表がなされたが、自由学園最高学部のリベラル・アーツを彷彿させる、多彩な報告であった。例えば、現代の子育てをとりまく環境を睡眠時間・父親の育児・子どもの空間・母親の育児不安という4つの視点から考察する研究、ナチスによるユダヤ人大量虐殺ホロコーストとイスラエル建国前後から現在まで続くパレスチナ紛争を切口として8名のユダヤ系思想家・政治家・歴史家の思想を比較する研究、自由学園の教育に構造方程式モデリングによる客観的評価を与えて他大学と比較する研究、自由学園内にある芝や雑草から粉塵爆発を起こしてエネルギーに変えようという研究、日本と自由学園における消費組合活動をマーケティングのフレームワークを使って調査して販売活動を実践する研究、などがあった（図1左）。



図1. 卒業研究報告会の様子

また2014年度は、例年と異なり、学生の発案によるディスカッションも行われた（図1中央）。学生たちはそれぞれの

卒業研究の背景や、動機となる自由学園での体験を語り、それらが研究を通してどのような思いになったのかを伝えた。1本の大きな樹木の絵を用いて、その土・根・幹・枝のそれぞれにあたるものは何なのかを示した図が印象的であった。

最後に、矢野恭弘学園長から発表者への講評をいただいた(図1右)。ディスカッションの際に、ある学生が語った「自由学園では友人の学びが自分の学びになる」という発言を受け、ご自身が留学されたオックスフォード大学にも、寮で専門の異なる学生同士のコミュニケーションがあったと語られた。自由学園では実学と協同を大切にしたいと締めくくられた。

発表者は、全員、氏名と研究タイトルを明記したネームプレートをぶらさげて、休憩時間や昼食時他に来場者と自由に交流していた。アンケートでも、コメントを多くいただいた。例えば、「司会のメリハリがきちんとしていて、多少時間がオーバーしたが気にならなかった」(卒業生)、「自由学園で学んだことを深め、それをふまえて学校に提案する内容が多く、力のある、充実した報告会だった」(父母)、「すべての発表に言えると思うことは、これが大学での教育だということ。自分で感じ、自分でテーマを見つけ、自分で研究する姿があった」(講師)のようなコメントがあった。

当日はあいにくの雨であったが、来場者数は480人を数えた。来場くださった皆様に感謝申し上げる。

(2) 学術研究集会での発表

2014年度もいくつかの卒業研究が学外の学術研究集会で発表された。

11月7日から8日に開催された第26回位相幾何学的グラフ理論研究集会では、小池真秀さんが口頭発表「幾何学的錯視の活用と応用」を行った(藤2015a)。複数方向からエビングハウス錯視効果が確認できる立体模型と、カフェウォール錯視を利用して重力に反する物理現象を認知させる模型を制作し、日常生活への活用の可能性を述べた。

2015年2月28日(土)には、九州大学箱崎キャンパスにて開催された日本教育工学会の研究会：学習支援環境とデータ分析において、鈴木仰くんが口頭発表「リベラルアーツ大学における学生満足度の構造方程式モデリング」を行った(藤2015b)。大学生の「大学生活の満足度」を押し上げる要因を探る意識調査を自由学園最高学部と国際基督教大学の学生に実施し、その結果を、構造方程式モデリングを用いて分析・考察した。なお、本研究は、9月21日(日)に岐阜大学で開催された第30回日本教育工学会全国大会においても、口頭発表されている。

3月2日(月)から5日(木)まで北海道大学にて開催された「第11回数学総合若手研究集会～多分野間の交流による発展・発見を目指して～」では、恩田将樹くんと宮加谷直哉くんがポスター発表を行った(藤2015b)。題目は「パターン認識を用いたかたちと動きと数理解析」で、計算幾何学のボロノイ図を用いたサッカーの守備戦術解析と、毛筆文字画像をデジタル処理して特徴を抽出する手法を示した。

3. 3年生による合同公開ゼミについて

3年生は、ゼミナール間の研究交流と卒業研究の前準備として、部内で合同公開ゼミナールを行っている。2014年度は表2に示すプログラムで11月6日から8日までの3日間の夕方に開催された。

初日より2日目、2日目より3日目と、徐々にディスカッションが活発になっていった。司会を務めた学生は「ゼミを越えてさまざまな分野の先生方からご意見をいただき、研究を深めるよい機会となった。それぞれが個性的な研究をしていて、互いに刺激しあい、今後の発展の可能性を感じた。今回はゼミごとで発表を行ったが、いつの日かゼミの枠組みをも越えた研究発表を行うことができたらよいと感じた」と語った。

表2. 3年生による合同公開ゼミのプログラム

11月6日(木) 17時から19時まで		
人間形成と教育		
1	教育とはサービスか：内田樹『下流志向』から検証を通して	共同 [3]
数理モデルとインターフェイス		
2	プロモーションビデオにおける効果的演出方法の探求	個人
3	相関系と関係の新たな図式化	個人
4	自由学園内のさまざまな観測データの運用	個人
5	楽譜に依らない音楽の可視化	個人
6	拡張現実を用いた3Dインターフェイスの研究	個人

11月7日(金) 17時から19時まで		
世界と日本の文化		
7	「逆転しない正義」の豊かさ：最弱のヒーローにみる、やなせたかしの正義観	個人
8	聖書と歴史とに見るイエス・キリストの違い	個人
9	「特攻隊」と「自爆テロ」の比較	個人
10	ウイスキーの起源とヨーロッパ史	個人
11	アンデルセン童話とデンマーク	個人
12	『青い鳥』の結末から見る幸福の考察	個人
13	物語・絵画での「形而上」的表現の可能性	個人
14	日本の妖怪と民俗学	個人
15	スポーツ文化から見た日本人	個人
16	自由学園・学園町と久留米村のかかわり	個人
自然の理解と創造		
17	自然の中の動物：博物館での標本作製を通して	個人
11月8日(土) 14時から16時まで		
ライフスタイル		
18	自由学園周辺のまちの発展と西武鉄道の沿線開発との関わり	個人
19	これからの都市の住まい	個人
20	現代の便利さとストレス	個人
21	現在の販売流通形態と衣服サイズの考案	個人
22	日本国内における街路景観の美化の為に広告規制と新たなマーケット提案	個人
環境と経済・社会		
23	名栗地域の地域振興についての研究：名栗の地域おこしを通して	共同 [5]

4. 2年課程卒業勉強について

最後に、自由学園最高学部2年課程卒業勉強について述べる。

2年課程も、自由学園で学んできた学業の集大成として、最終学年の1年間を通して卒業勉強に取り組む。テーマは原則的に講義で学んだ内容を深めるものとし、クラス担任教員と相談して、指導教員も含めて、1年生の終わりに決定する。卒業勉強に取り組む時間は時間割に組み込まれている。勉強の成果は論文形式にまとめ提出する。また、4年課程と同じ日に卒業勉強報告会を開催して、口頭発表を行う。

2014年度のテーマは「自由学園でどのような歌が歌い継がれてきたか」で、8名によるグループ勉強であった。自由学園で歌い継がれている歌を調査するとともに歌が団体に与える影響を考察した。

参 考 文 献

遠藤敏喜 (2015a) “学会発表 幾何学的錯視の研究”, 学園新聞 第669号 (2015年1月号), 自由学園出版局.

遠藤敏喜 (2015b) “学会発表 研究を社会につなぐ”, 学園新聞 第671号 (2015年3・4月号), 自由学園出版局.

遠藤敏喜 (2015c) 自由学園だより “人と人, 人と社会がつながる研究”, 『婦人之友』第109巻5号 (2015年5月号), 婦人之友社.